

農学分野の国際協力キャリアパスについて考える

槇原 大悟 (名古屋大学農学国際教育研究センター・准教授)
 伊藤 香純 (名古屋大学農学国際教育研究センター・准教授)
 浜野 充 (信州大学農学部農学生命科学科植物資源科学コース・講師)
 菊田真由実 (名古屋大学アジア共創教育研究機構・特任助教)
 松川みずき (国立研究開発法人国際農林水産業研究センター・任期付研究員)
 栗田 明華 ((株)レックス・インターナショナル)
 長谷川友美 (名古屋大学大学院生命農学研究科博士課程後期課程)
 江原 宏 (名古屋大学アジア共創教育研究機構・教授)

農学分野の国際協力に関心がある。でも、何から始めればよいのか分からない、どうしても一歩踏み出せないという悩みを持つ方はたくさんいるのではないのでしょうか？名古屋大学農学国際教育研究センターの教員や卒業生には、職業として農学分野での国際協力に係わる先人がいます。彼らが何を考えて、どのようなキャリアパスを描いてきたのか、経験を共有してもらうために座談会を企画しました。

1. キャリアパスは人それぞれ、海外に飛び出したきっかけは？

江原 日本の若者については、内向き志向で海外への関心や興味が少ないなどと評されることも多々ありますが、グローバル化への意識を持っていて海外留学や国際協力に関心のある若者も多くいると感じています。国際協力を仕事にするためのキャリアパスは様々で決まった答えがある訳ではありませんが、先人達の経験というのは良きにつけ悪きにつけ参考になると思い、今回の座談会を企画し、農学分野の国際協力の実務経験のある農国センターの教員、そして農国センターで勉強した卒業生にお集まりいただきました。みなさんのキャリアパスや海外に飛び出したきっかけ

け、苦勞した経験と仕事のやりがい、そして、これからの世代に伝えたいことなどをざっくばらんに語っていただきたいと考えています。最初に、自分自身のキャリアアップについていつ頃考え始めたのか、学生時代にはどのように考えていたのか教えていただけますか？

槇原 私は、多分皆さんとそう変わらないと思うんですが、高校生の頃とか学部生の頃はそんなに明確なビジョンを持ってはいませんでした。ただ自然とか生き物が好きで、食糧問題や砂漠の緑化などに関心があったため農学部を選びました。大学の研究室を選ぶ時には、地球環境問題とか、そういったことに仕事として取り組めたら夢があるなどのイメージしかなくて、具体的には何がしたいのかまでは想像が及んでいなかったんですね。とにかく関心があることに近い研究分野に行こうということで、イネの塩害などを研究していた作物学の研究室に入りました。

江原 何がきっかけで国際協力の道に進むことになったのでしょうか？

槇原 間接的かもしれませんが、きっかけとなったのは、修士の時にフィリピンに1年間留学するという機会をいただいたことだったのかなと思います。これは本当にたまたまだったんですが、当時の指導教員の先生から、フィリピ



槇原大悟

岡山大学大学院自然科学研究科博士課程修了後、名古屋大学農学国際教育協力研究センター研究機関研究員、JICA長期派遣専門家を経て、平成19年より現職。専門は作物学で、現在は主にアフリカを研究フィールドとしている。学生時代にフィリピンにある国際稲研究所(IRRI)に留学した。JICA専門家として、カンボジアの農業高等教育強化や東アフリカ(ケニア、タンザニア、ウガンダ)における貧困削減のための研究開発プログラムの開発・運営に現場レベルで従事した経験をもつ。

ンにある国際稲研究所が研究留学する日本人学生を募集しており興味があれば紹介して下さるとい話をいただいて、それは面白いなと思って、その場で「是非行かせてもらいたいです」と答えました。その後のキャリアについても、ほとんどのことは、元々考えたプランに沿って進んできたのではなく、その時々頑張っていたら、次に何らかの選択肢が出てきて、ある一方を選んだ結果として、今のキャリアに繋がってきたという感じです。私の場合は、生活の安定とか給料が多いとか、そういったことではなく、こっちの方が面白そうだということで道を選んできました。結果的には、それで生活が苦しくなったとかはなかったので、運が良かったんだなと思っています。

江原 指導教員からもらったチャンスを逃さずに一歩踏み出した、そこから次の選択につながっていったのですね。それでは、浜野先生はいかがでしょう。

浜野 高校の時は、国際協力まで考えてなくて、ただその当時、国際というのはブームになっていて「カッコいい」というようなフワフワしたイメージを持っていました。環境問題もクローズアップされていたので、そんなことを学べるところということで近畿大学農学部国際資源管理学科に入学しました。研究室で指導をいただいた先生方が、国連のFAOで長年仕事をされてきた方々で、開発途上国の話や国際協力の考え方を聞いて刺激を受けたのが大きかったと思います。それで、国際協力ってというのが自分の中で、大きくなっていきました。

江原 浜野さんは農学部を卒業して、JICAの青年海外協力隊に参加されたそうですが、就職は考えていなかったのでしょうか？

浜野 全く考えていなかったです。海外に行きたいと思っていました。農学の国際開発について学べるイギリスで修士号を取得することも考えていました。国際協力の分野でキャリアアップを目指すには修士号を持っていた方が良いという認識と、実は半分くらい、趣味のラグビーを本場の

イギリスでやりたいという思いもあつたりして(笑)。でも、お金もないし、英語力もいきなり上がるわけない。現場のことを知らずに学ぶより、まずは実践を積みたいと思い、協力隊1本に絞りました。

江原 協力隊の先に、イギリスで修士をとるということが頭にあったということですか？

浜野 そうですね。頭によぎっていました。実は、4年生の時の卒業旅行でイギリスに行った時、大好きなラグビーの5カ国対抗戦が開催されていたんです。でも、チケットは売り切れで入場できず、会場の外から盛り上がる歓声を聞いて、とても悔しく、絶対次はここでラグビー見てやる！いやプレーする！と思いました。そんな動機も半分くらいありました。実際、協力隊を経てイギリスに行くことになるんですが、大好きなラグビーはやりましたね。

江原 ちなみに協力隊では野菜隊員として行っていってしゃいますよね。修士課程では、もともとご専門の開発学ではなく野菜について学ぶことは考えなかったのですか？

浜野 もし大学で野菜や稲などの栽培学を学んだ上で、協力隊で野菜隊員として任務を行っていたなら、修士課程でも栽培学を突き詰めたいと思ったでしょう。でも、自分の中で大学の4年間のバックグラウンドが栽培学ではなかったというのが大きくて、修士課程で栽培学を選んで、一から学ぶ勇気はありませんでした。あと、イギリスの場合、開発学だと1年で修士号が取れるのですが、自然科学系の栽培学だと2年必要でした。お金の面でも、イギリスに2年間滞在すると約500万円かかるのに対して、1年間だと安く抑えることができるという点も考慮しました。実際には、事前に半年間、語学学校に通って、その後に修士課程に入ったので、350万円くらいかかりました。

江原 留学資金はどのようにして工面されたのですか？

浜野 協力隊赴任中の国内積立金と、帰国後約1年間協力隊訓練所で仕事をしてお金を貯めようとしたんですが、最終的に250万円しか貯まりませんでした。イギリス渡航のた



伊藤香純

University of Utah 地理学部環境地理学科を卒業後、桜美林大学大学院国際学研究所修士課程を経て、名古屋大学大学院生命農学研究所にて博士号（農学）を取得。財団法人国際開発高等教育機構（現：国際開発機構）（FASID）、JICA カンボジア事務所、JICA 技術協力専門家、インテムコンサルティングでの国際協力業務を経て、2008年より現職。開発途上国における農家の問題把握、解決方法の提案と社会実装、そして社会実装の評価までを一つの研究として捉えるアクション・リサーチ法を用い、研究と国際協力を同時に実施するアプローチに取り組む。

めに、家族にお願いしてお金を借りることになりました。

でも、本来は奨学金を計画的に狙って、資金を獲得すべきだったのだと思います。今教員として（自分のことは棚に上げて）、若い学生には、英語をしっかり勉強して、そのスコアを上げて、しっかり奨学金をとることを勧めています。英語を勉強することでチャンスは広がると思います。

江原 修士課程を修了した後、JICAでジュニア専門員になって農業系のお仕事に取り組みられますよね。そこまではよく分かるのですが、その後は突然ジェンダーの分野に取り組みられていますよね。

浜野 その時点では博士課程への進学は考えていませんでした。最終的に目指すところは、JICAの国際協力専門員で、そのためには、まず技術協力のプロジェクトで専門家としての業務の経験を積まなければならないと思っていました。ジュニア専門員に合格して、農業開発プロジェクトで専門員の方に指導を受けながら仕事ができたととても貴重な経験でした。その後、開発コンサルタントに所属し、ジェンダープロジェクトでの仕事につながりました。

江原 失礼ですが、浜野さんは、それまでジェンダー分野での実績などはなかったように思いますが。

浜野 私は、JICAのジュニア専門員になるときに、ジェンダーの研修プログラムも受けていたので、応募の際の履歴書にも書きました。あとは、母が京都でずっと男女共同参画の取り組みに関わっていたこともあり、そこから得た知識もありました。ただ、確かに経歴としてはほとんどないですね。でも、応募した職種は業務調整員兼研修事業の担当だったので、ジェンダーという専門分野での経歴よりも、女性が多い職場に男性が入って調整力を発揮するということが期待されたと思います。

江原 その後、博士課程に進まれたわけですね。

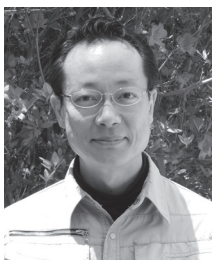
浜野 そうですね。現場で色々な経験をする中で、自分の感じている疑問点とかを整理したい、あとは自分の専門性も上げたいという思いで博士課程に進んで、農国センター

にお世話になることになりました。その後、今の信州大学に教員として採用していただきました。

江原 他の皆さんにも何かきっかけのようなものがあったのでしょうか？

伊藤 私は、中高生の時には、漠然と海外で仕事してみたいなと思っていました。英語が一番得意だったこともあり、国外に行きたいな、と。でも、留学はお金もかかるし、自分には縁のないものと思っていました。大学進学を考える中で、高校1年生の夏休み明けに文系理系の選択を迫られたことが「え、今ですか！もうですか？」と、とても衝撃的なことでした。どのような職業が存在し、何を学べばどんな職業に就けるのか、といったこともわからない段階で文系・理系の選択や学部を選択を迫られることに抵抗がありました。いつそのこと大学進学をやめようかと思っていた矢先に偶然、知り合いから海外の大学のシステムについて話を聞きました。当時、やりたいことは見つかっていなかったけれど、大学では、やりたいことを見つけて没頭したいと思っていたので、入学後でも理系・文系の垣根を超えて学部選択や変更が可能な海外の大学に進学することにしました。実際、入学後に5回以上も所属学部を変更しながら、自分の学びたいことを学んでいるうちに到達したのが国際協力でした。でするので、きっかけは日本の大学入試制度かも知れませんね。その後は、その時々のお会いや先生から頂いた言葉、仲間との話などに導かれていろんなことを決めてきました。最初から何か一つやりたいことがあって突き進んできたわけではないですね。

菊田 私自身は中高生の頃、海外で働くことについてかっこいいとは思っていたけど、自分自身の将来としてほとんどイメージしていませんでした。なんとなく生物が得意だったので、農学部への進学を決めました。農学部に入ってみるといいものの、浜野先生と同じくフワフワしていました。農学部で自分は何がやりたいのか明確でなく、どうしようかなと思っていました。そこで海外で研究をしている先生



浜野 充

近畿大学農学部国際資源管理学科国際農業開発研究室で学んだ後、JICA青年海外協力隊に参加し、ホンジュラスの山間地域で3年間高原野菜の導入や経営改善、農家の組織化の促進などの活動を行った。英国イーストアングリア大学修士課程で農村開発学を学んだ後、JICAジュニア専門員としてカンボジアの農業・農村開発技術協力プロジェクト、ジェンダー主流化プロジェクトで合計5年間従事し、名古屋大学博士課程で農国センターの指導の下でカンボジアの農村の農産物加工業における収入向上について実践型研究を行った。現在は信州大学農学部で日本の中山間地域と開発途上国の農村をつなぎながら、教育研究に携わっている。

に出会い、自分の知らない世界を見てみようと思い、学部生時代に海外で研究ができる研究室に所属することを決めました。その後縁があり、海外でやってきたことから修士、博士、就職につながっていきました。自分の興味のあることを続けてきた結果、今に至ると感じています。

栗田 私は、小さい頃から農業に興味があり、中学生の頃から国際協力にも興味を持つようになったので、将来は農業分野で国際協力をしたいと思っていました。その後、作物栽培学を学ぶために大学の作物学研究室に所属しました。当時の指導教授に国際協力について相談したり、就職活動や短期の海外ボランティア活動をしたりする中で、開発コンサルタントを目指すことに決めました。でも、開発コンサルタントになるには、修士号や海外経験が必要であるということが分かり、海外で研究させてもらえる研究室に入って修士号を取ることを考えました。修士（博士前期課程）では農国センターの研究室に所属し、アフリカの現地で研究をさせてもらいました。私は、ずっと開発コンサルタントを目指して進んできた結果、今に至るとい感じです。

江原 栗田さんの場合は、思い描いていたキャリアパスを実現できてきたという感じなのですね。

長谷川 私の場合もまた、親の実家が岐阜にあり、自然や田舎が好きで漠然と農学系に興味があったことから農学部を選択しました。香川大学に入学しましたが、香川大学の特徴として学部生向けに様々な海外プログラムを提供していました。そのおかげで文化交流や海外渡航が気軽に身近な機会となり、初めて海外に興味を持ち、特に途上国の食糧問題について関わりたいと学部時代に考えていました。研究室選択の際も、イネの病気や食糧増産について研究を行っている研究室を選択しました。実際に研究室に入ってみて、フィールドで行われている研究は少なく、ラボ内での遺伝子やタンパク質の解析等がメインで、自分がやりたいと思っていたイメージとは違うなと感じていました。そこで、修士（博士前期課程）では農国センターへの進学を

決めました。研究分野もしっかり取り組みつつ、実際に現地で実践が積めるということが魅力でした。当時、名古屋大学国際開発研究科への入学も検討しましたが、今まで学んできたこととフィールド実践という良いところ取りができるのが農国センターだと思い、最終的に判断しました。

江原 松川さんの場合は、今の自分を中高生の頃に想像していましたか？

松川 全く想像していませんでした。大学・修士1年生の頃くらいまでは、小学校の先生になるのが目標だったので、今のような研究者になっているとは夢にも思っていませんでした。農学部に入ったのは、教育大学というみんながみんな教師になるという世界でそのまま教師になるよりは、教師を目指していない人たちのいる環境で、いろんな人の意見を聞きながら自分が本当に先生になりたいのかとか考えながら学生生活を送りたかったからです。あとは、生物が好きだったからという理由で農学部を選びました。農国センターに行こうと思ったのは、海外実地研修に学部3年生の時に参加したことがきっかけでした。そこで全然自分が知らない世界を見て、こんなに知らない世界があるまま教師になっていいのだろうかと思い、伊藤先生のところへ相談しに行きました。伊藤先生とお話する中で、農国センターでは修士2年間を自由度高く研究させてもらえると感じました。また、私が2年間を修士課程に費やしたことで、私の長い人生に及ぼす影響（ハンデ）は小さく、逆にこの2年間に経験を増やすことで、子供たちにより多くのことを教えられるのではないかと考え、修士進学を決めました。初めは、修士の2年間だけ決めていましたが、研究指導をしていただいた害虫制御学研究分野の田中先生（田中利治名誉教授・農国センター客員教授）にいろんなことを教えてもらっていたこともあり、後半になると研究が面白くなってきて、あと3年間の博士後期課程まで続けることを決めました。当時は、博士卒業後もさらに研究を続けるとは思っていませんでした。しかし、博士最終年に



菊田真由実

高知大学農学部農学科を卒業後、同大学大学院総合人間自然科学研究科修士課程、名古屋大学大学院生命農学研究科博士後期課程を修了し、博士（農学）を取得。同研究科博士研究員として、ケニアに駐在後、2017年10月より現職。インドネシアやケニアをフィールドに作物栽培学に関する研究に取り組んでいる。現在は、作物栽培学に加え、農家へのインタビュー調査を実施するなど、社会科学分野の手法も取り入れつつ研究を行っている。

国際農研（国際農林水産業研究センター）からちょうど自分の研究テーマと同じ分野での研究員公募が出ていたのを見つけ、ダメもとで挑戦してみると運よく採用していただきました。振り返ってみると、単純に面白そうなことをふらふらと追いかけていた結果で、今のキャリアにたどり着いたのかなと思います（笑）

伊藤 私からも、松川さんは「好きなことやっていたら、ここまで来ました」という感じに見えますね（笑）

2. 女性としてのキャリアアップ

江原 ここでちょっと視点を変えて、女性の視点からキャリアアップについて思うところを聞いていきたいと思えます。女性陣の皆さんにお聞きしますが、博士課程に進学する際に女性として迷ったことはありますか？

長谷川 私が名大に修士で入学した時に、ちょうどウェルビーイングというリーディング大学院プログラムがあって、あまり深く考えずにプログラムを利用して博士進学しようと考えました。当時は博士を遠いものとして考えていませんでした。やっぱり、親からは結婚について心配されますし、自分も少し心配です（笑）。

伊藤 私は、自分が結婚して子供を産むことになるとは思っていませんでしたので、結婚や出産といった女性としてのライフイベントや、ライフワークバランスなどを心配したことはなく、キャリアのみを考えていました。両親からも、特に結婚や出産を急かされることはなく、やりたい研究や仕事にチャレンジさせてもらえました。JICAの専門家や途上国での技術指導の仕事をするために、自分に何が必要かと考えながらフィールド研究をしている中で、博士学位の有無で現地政府の職員の対応が明らかに異なるという現実を痛いほど突きつけられました。開発途上国では、日本とは比にならないくらい多くの政府高官が海外留学などによって博士学位を持っています。彼らとの対等な議論が求

められる国際協力の舞台において、博士学位は一つの武器になるのだと感じました。その後は、学位取得や仕事に突き進んだため、迷うことはなかったですね。

松川 私の場合も、修士2年の夏、教員採用試験を再度受験するかしないかと考えていた時に、博士進学について少しだけ迷いました。受験日程と研究対象であるウンカの発生時期が同時期だったため、受験して満足な研究データを取れずに卒業するか、研究データをとって受験せずに博士進学するという二択になりました。両親、特に父には博士に行って将来どうするつもりかと反対され、親戚にもそんなに長く大学に行くのかと言われました。でも、そのタイミングで博士進学を心の中では決めていました。最後に背中を押してくれたのは、田中先生の「僕は、松川さんが博士進学するという覚悟ができました。」という言葉でした。先生に先に覚悟を決められてしまったので、そこまで深くは悩みませんでした。

菊田 私の場合、親はあまり反対しませんでした。でも、博士まで進学する人が周りにいなかったのも、友人からは「そんなに勉強するの？」と言われていました。農国センターには、博士を持っているママさん研究者が多くいらしたので、こういう道を選んでいる人もたくさんいるのだということを知りました。私も農国センターに来てよかったなと当時感じていました。

江原 博士学位取得後にどのようなキャリアパスを作っていくかと考えていたのでしょうか？長谷川さんの場合は、研究者や実務家などいろいろな道がある中で、企業等の就職活動を経てJICAへの就職を決めた理由や経緯を教えてくださいませんか？

長谷川 博士まで進学しましたが、就職活動では普通の学部生と同じようにいろんな企業の選考を受けていました。研究職以外のポジションに応募した際には、「なぜ博士課程まで行って研究職ではないのか」多く聞かれました。就職活動をする中で、自分がしたいことについて改めて考えて、



松川みずき

名古屋大学農学部資源生物科学科卒業。学部3年次に農学部の海外実地研修に参加し、訪問先であったカンボジアの農業に興味を持つ。名古屋大学大学院生命農学研究科に進学し、カンボジアにおいてイネの害虫であるトビロウンカに関する研究に従事（2016年3月、博士後期課程修了）。その後、国立研究開発法人国際農林水産業研究センター・任期付研究員として、ベトナムにおけるイネウンカ類の研究に従事。2021年1月に出産し、現在産後休暇中。

研究者として、フィールドに行って、研究を通して役に立つということもいいなと思いましたが、自分は研究者と現場をつなぐ役割を JICA でできるのではないかと思いました。ラボで行っている研究を実際に現場に持って行って役に立ったり、いろんな分野をつなげて効果的な成果を生み出したりできるのが JICA なのではないかと思い、就職先として選びました。

江原 松川さんが国際農研を選んだ理由はどんなことだったのでしょうか？

松川 まず、研究者としてキャリアを進めたいと思った時に、JSPS のポストドクターに応募しましたが、落ちてしまいました。その結果を知った時に、ちょうど国際農研の公募があって、その公募のたった数行の案内に、「越境性害虫」、「アジア・アフリカで研究ができる」というキーワードを見て、自分にはここしかないと思い、ダメもとで応募しました。

江原 民間企業への就職等は考えませんでしたか？

松川 民間企業への就職等は全く考えていませんでしたね。研究を続けるなら、アカデミアでと考えていました。

江原 伊藤先生は、どのようなキャリアを目指していたのでしょうか？

伊藤 私の場合、国際協力の現場で仕事をするために博士学位を取得しようとしていたので、どうやったら博士卒から実務の道に入れるのか、について大学院在学中に模索しました。JICA 専門家、コンサルタント、国連職員など様々な方々から話を聞いていると、国際協力への入り口は、一つではないことがわかりました。例えば、新卒で JICA 職員やコンサルタント会社に入るという正門玄関だけでなく、NGO や協力隊等で実務経験を積んでからコンサルタント会社の中途採用や JICA 専門家として国際協力に携わる方法もあります。自分はどこから攻めようか、と考えながら、博士学位の取得後は、まだ論文にできていないデータを論文文化するために研究生として研究室に残る予定でした。長谷川さんのように、博士論文や学位審査の準備をしながら就

職活動なんて、そんな余裕は全くなかったですね。身の振り方を考えつつ、博士論文のプレッシャーから解放された状態でのんびりと研究に向き合ってみよう、と。そんな矢先、卒業式目前の3月中旬に FASID（現在の国際協力機構）という財団法人の公募を見つけました。FASID は、JICA 事業で活用されているプロジェクトの計画・管理・評価手法である PCM（プロジェクト・サイクル・マネジメント）を開発・提供していました。当時 PCM は、JICA 専門家で派遣される人や、コンサルタントとして勤務されている社会人のみ研修受講が可能でした。プロジェクト評価の研究をしていたこともあり、どうしてもこの研修を受講したかった私は、名古屋大学の国際開発研究科で特別に開催されていた学生向けの PCM 研修を頼み込んで受講させてもらいました。その後、FASID で開催されていた様々な研修やモデレーター養成講座を受講させてもらうなど、在学中からとても縁のある組織でした。奇跡的に採用され、FASID で働く中で、外務省の国際協力担当の方や、JICA 職員や事業関係者の方と仕事をする機会が多くあり、常に「私の専門は森林資源管理で、途上国の現場で仕事がしたいんだ！」という情報発信を常に心がけていました。そんな中で舞い込んだのが JICA カンボジア事務所のポストでした。その後は、一つ一つの出会いや仕事に誠実に向き合う中で、次の仕事の話が舞い込む、という形でした。

江原 松川さんも、伊藤先生もいろんなご縁やタイミングが今につながっている感じですね。

伊藤 そうですね。大学に戻ってきたのもご縁でした。私は、博士課程在学中に農国センターのリサーチアシスタントとして働いていたので、カンボジアに赴任する前に農国センターに挨拶に行きました。そのことを覚えていた農国センターの松本先生（松本哲男名誉教授・農国センター元教授）がカンボジアを訪問される際に声をかけてくれて、名古屋大学がカンボジアで実施していた調査研究をお手伝いするようになりました。もともと私には、大学に戻って研究者



栗田明華

名城大学農学部生物資源学科及び名古屋大学大学院生命農学研究科博士前期課程（修士）を経た後、(株)レックス・インターナショナルに入社。現在、稲作振興に係る「シエラレオネ国持続的コメ生産プロジェクト」の業務調整員として従事している。中学生の頃より、将来の夢は国際協力に携わることだった。



ウンカを捕獲するネットトラップ(カンボジア)

になる、という想定は全くありませんでした。でも、国際協力の現場で仕事をしていると、研究と実務の乖離のようなものを強く感じるがありました。例えば、国際協力事業を実施する際には、現地の問題やその原因を正しく把握する必要があります。これが一番重要なのですが、一番難しく時間を要するわけです。その地域に関する調査・研究論文などが存在する場合には、大いに参考になり得るのですが、論文を検索することすらされていないことがあります。研究と国際協力は、目的が異なるかも知れませんが、

相乗効果が十分に期待できると思うのです。それにもかかわらず研究結果が実務の現場で十分に活用されていない現実を知り、研究と現場をつなげることの必要性を強く感じたことが、大学に戻る一つのきっかけになったように思います。

3. 国際協力の実務と大学での研究

江原 榎原先生も浜野先生も JICA の専門家になって国際協力の実務を経験されていますが、なぜ、その後大学に籍を置いて活動していこうと思ったのですか？

榎原 はい、私は大学教員になる前、JICA の専門家としてカンボジアとケニアに赴任してプロジェクトを実施していました。JICA 専門家の仕事というのは、ほとんどの場合、自分以外の誰かが立案したプロジェクトや職務内容があって、それを実施する人として採用されます。計画から大きく外れることを実施するのは基本的には NG です。また、プロジェクト形成のための調査や計画立案するのもコンサルタントや専門家の仕事ですが、その場合、実施するのは別の専門家ということになります。その点、大学の場合、プロジェクトは自分で作って、自分で実施する。自分で思うようにやれるという点に魅力を感じて大学に戻りました。

江原 大学だと自分で研究を立案して、自分で実施できるというところですね。

榎原 そうですね。JICA の専門家には任期があつて、だいたい2、3年の任期で交代することになります。一人の専門家が最初から最後まで一つのプロジェクトを担当することはほとんどありません。最初から最後まで、10年単位の長期に亘ってプロジェクトを考えられるというのは、大学教員ならではのことだと思います。JICA の専門家のように、比較的短期間で様々なプロジェクトに携わるのも勉強になるし、新鮮味があつて面白いんだけど、やはり大きな目標を達成しようとする場合、長い時間が必要なので、大学で



長谷川友美

発展途上国での食糧増産に関心があり、学士課程では香川大学でイネの病害抵抗性の研究に取り組み、博士前期課程(修士)から現在(博士後期課程)まで名古屋大学でイネの低温および乾燥ストレスに関する研究を進めている。途上国での現地研究者やスタッフとの研究活動に加え、多様な視点から食糧増産を学ぶため、博士課程リーディングプログラムに所属し、国や専門分野を超えた研修や講義に積極的に参加している。



酒造農家に対するプロジェクトスタッフによるモニタリング指導の様子(カンボジア)



米蒸留酒の品質改善のための技術指導(カンボジア)

やりたいと思ったわけです。

浜野 槇原先生に全く同感です。そもそも博士課程に入って農国センターで勉強をしたいと思ったきっかけも、槇原先生がおっしゃられたことを感じていたからです。協力隊は3年の任務が終われば帰国して、専門家としてもプロジェクト自体が3年で区切られていました。3年では、導入した技術やシステムが採用されて、収入や生活まで影響が出るころまでは実際には確認できません。農業・農村開発のプロジェクトの場合、1年目はベースライン調査や現場の体制づくりがメインになり、本格的に活動しているのは実質2年半。そうすると、プロジェクトによって変わったかどうか、農民の役に立ったかどうかは確認できない。プロジェクト自体が終了した後は、お金の切れ目は縁の切れ目で、現地の役所も予算がなくてプロジェクトを継続できない。他の部署、新しいプロジェクトが始まったら、そちらに人材が異動する。プロジェクトで実施された活動の持続性や効果に違和感を持つようになり、もう一度大学で学びたいと思っていました。農国センターでは、対象地域において、大学

が途上国の大学と連携して、長期的なスパンで農村開発を実施するプロジェクトを実施し研究を行うことを学びました。

江原 お二人とも、長期的なスパンで問題解決に取り組みたいという思いが強かったということですね。

浜野 2、3年では、ようやく課題が見つかって終わりですよ。その課題自体も本質をつけているかは分かりません。

江原 お二人とも学部は名古屋大学ではなく、その後留学もされて、JICA 専門家を経てきましたよね。いろんなところを経験されたお二人からみた農国センターのいいところや農国センターでこそ学べたことなどがあれば教えてください。

浜野 農国センターでは、松本先生や伊藤先生に多大なご指導をいただきながら、カンボジアで酒造農家がどのような経営状況で、どのような技術を使っているのか、どのような生活をしているのか、課題が何かという調査から始めて、その課題を解決するためのプロジェクトを作り、カンボジア王立農業大学のスタッフと農家とともに課題解決に



江原 宏

岡山大学大学院自然科学研究科出身、学術博士。日本植物調節剤研究協会技師、三重大学教授・国際担当副学長を経て、2017年より現職、2019年に農学国際教育研究センター長。JICAのタイ派遣専門家(植物バイオテクノロジー研究計画)、インドネシア調査団(大学研究連携基盤強化技術協力)、ミャンマーの大学支援、フィジー草の根協力事業、短期・長期研修(アフリカ、東南・南アジア、中南米)等のコーディネーター/研究教育指導を担当。農学知の支援ネットワーク(JISNAS)事務局長、日本熱帯農業学会副会長、サゴヤシ学会会長を務めている。



イネ幼苗の生育測定中(シエラレオネ)

取組み、それを評価し、そのサイクルを繰り返すというプロセスを経験することができました。愛知県の発酵の専門家に長期にわたりご指導をいただき、食品工業技術センターや麴会社、カンボジアの邦人企業の協力や大学・省庁との連携を得ながら、JICA 草の根事業や文科省などの研究プロジェクトとして取り組んできました。また、技術開発・普及だけでなく、マーケットが何を必要としているかも重要で、どんなにすごい技術を導入してもマーケットが欲していなければ定着しません。このようなことを6年間の間に経験できました。

榎原 名古屋大学には、農学分野にも、すごい研究成果を挙げている研究者がたくさんいるのですが、そんな研究者達と協力して面白いプロジェクトを実施できたということ

も農国センターに来て良かったことのひとつです。農学系の研究者の中には、研究成果を開発途上国の農業現場で役立たせたいという思いを持った人も結構たくさんいるんです。でも、みんな現場経験はないし、海外のフィールドに展開して現地で研究するような体制も持っていない。大学には私のようなキャリアを持った人はあまりいないので、一緒にやろうという話が自然にできてきました。

浜野 いろんな人たちと協力しながらプロジェクトをしていくというのが、農国センターの面白いところで、そこから学ぶことが非常に多かったです。伊藤先生や松本先生、専門家の方々から指導を受けられたのはもちろん貴重でしたが、農家の人たちと実際に何度もやりとりをしながら発見する課題ベースで研究をしていくというアプローチを学べたのはとても大きくて、今の信州大学での研究にもそのまま活かされています。

江原 農国センターで学んだ国際協力の形があるということですね。

浜野 今は必ずしも JICA や国連に入らなくても海外で仕事をするチャンスがたくさんあると思います。東南アジアの国々とも、援助されるの関係じゃなくなっていく流れにあるので、むしろ広い視野で考えて自分がどういう立場で働けるかを考えてみるといいと思います。最終的にはもちろん国際的に協力はし合っているのですが、いわゆる“国際協力”だけでなく、ビジネスであったとしてもグローバルにローカルに活躍できる人材育成に貢献できればいいのかなと思います。

榎原 一方的ではなく、双方が協力しあう関係になりつつありますよね。また、企業が利益の追求だけではなく、ビジネスを社会貢献に繋げるソーシャルビジネスの考え方も広まってきていますし、国際協力におけるプライベートセクターの重要性は誰もが認めるところでしょう。もはや公的機関の活動だけが国際協力という世界ではなくなっています。いろんな立場から国際協力に関わっていく時代になっていますね。

浜野 そう思います。また、これからは日本が海外の方をさらに受け入れるようになると思います。観光だけではなく、生活し仕事をするために移住する外国人が増えるということですね。農業の現場でも、多くの東南アジアの方が働いています。その人たちが来てくれた時に、地域の一員として受け入れることができる体制を整えなければならない

というのは大きな課題だと思います。そこで活躍できる人もいると思うし、そこも一つの国際協力の現場と言えると思います。

4. 大学で学んだこと

江原 榎原先生や栗田さんは、作物学専門でスタートして国際協力の場に出ていきましたが、浜野先生の場合には学部から開発学を勉強されています。国際協力に関心がある若い子達は、どちらを勉強するべきか悩むんじゃないかと思いますが、浜野先生はどのように考えていますか？

浜野 実は、今でもそのことでは苦しみ続けています。やっぱり農業や食品加工の現場と関わる時には、専門性というのは必要になってくるんです。私は修士課程でも結局開発学で学びましたが、開発学が何か専門性を身に付けるものかという点必ずしもそうでもないような気がしています。国際協力の仕事を考えた時には、専門性という武器を持ちながら仕事が始められるというのは非常に強みになると思います。その意味では、専門性が身に着く学問分野は有利かも知れません。

江原 榎原先生と栗田さんは、どうして作物学を選ばれたのでしょうか？

榎原 ラボだけで完結する研究というのは自分のやりたいことではなかったのですが、農学部に入って、それぞれの研究室が何をやっているのかというのを調べてみると、実際に畑とか田んぼで作物を植えている研究室っていうのはそんなに多くはなかったんです。それで、土をいじって作物を育てるというプロセスが含まれていて、塩害とか干ばつといった大きな問題を対象に研究を行っていた作物学の研究室を選びました。結局それが今につながっているんで、その時の選択は間違っていなかったと思っています。

栗田 私は、農作物を育てることに興味があったので、作物学を選びました。現在、稲作振興のプロジェクトの業務調整をしているので、活動に必要な機材の手配や現地スタッフの労務管理といった事務的な仕事メインですが、時には技術移転を行うための展示圃場に行くことがあります。圃場でイネの生育を観察すると、養分欠乏をしているかどうかが分かるので、これまで学んできたことが役に立っているのかなと思います。

江原 伊藤先生は、アメリカに留学されたわけですが、専



手動の回転除草機で作業する農家の女性(シエラレオネ)

攻はどのようにして決められたのですか？

伊藤 私は、アメリカの大学で、これやりたいなって思ったのが地理学だったんですけど、就職を考えたときに何ができるんだろう、食べていかれるんだろうかと、すごく悩みました。担当教授に相談に行ったところ、「君みたいに両親のサポートを受けて好きなことが勉強できる人は、世界人口の何パーセントか知ってるかい？自分の学びたいことが見つかри、好きなことを学べる環境がある。それでなぜ好きなことを学ばないんだい？」と呆れた顔をされました。そのとおりで、好きなことを専攻として選ぶことにしました。

榎原 私自身は、国際協力の世界に入る前に博士を取ったんですが、浜野さんは国際協力の実務と大学での勉強を行ったり来たりしながら博士まで進んで、栗田さんは修士を取った後にコンサルタントになったわけですが、お二人に国際協力の世界での博士の必要性についてどのように考えているのか聞いてみたいのですが、いかがですか？

栗田 開発コンサルタント会社に就職して、社員や同業他社の方の経歴をみると、青年海外協力隊に参加していた人、海外で修士号を取得した人、社会人経験を積んでから開発コンサルタント会社に入った人がいるので、正直どのような道が一番良いのか分かりません。ですが、青年海外協力隊や現地のフィールドでの研究などを通して現場経験を積むことが大事だと思うので、必ずしも博士課程まで進まなくても良いと思います。

浜野 私も国際協力の現場で仕事していくに当たっては、

ドクターが必要かという必ずしもそうではないなと思われ、現場で磨いていくところの方が大きいのかなと思います。ただ、現場だけでは客観的に見れない部分もあるかなと思うので、いろんなところに出て行って、その一環として修士課程や博士課程で学ぶ機会を作る、いわゆるリカレント教育的なところっていうのは、有効に使えるのかなとは思っています。

江原 現場経験を重視すべきという考えですね。

浜野 大学を卒業して、青年海外協力隊で海外にポイっと出て、しばらく国際協力の現場で仕事をしてきた時に思ったのが、やっぱり日本のことを知らないまま外に出してしまうことの不安定さですね。せっかく農学部に入って近くで学ぶ農業の現場があったはずなのに全然できていなかったんですね。「国際協力でいきなり野菜の普及指導」なんてことではなく、まず日本の野菜農家さんのところに行って、どんな風に野菜を作っているのか、経営はどうしているのか、農家の方々の考えを学ぶのが大事だと思います。また、現場に身を投じた時に会える人々から受ける刺激が一番大きいと思うので、そういうところも大事にしてほしいと思います。

江原 逆に大学教員として学生に向き合ったことで感じていることがあれば教えてもらえますか。

浜野 例えば、稲作の研究をするにしても、実際に稲作農家のところに行って、稲作を見て、そこで初めて知る稲作の技術や、現地の生活がありますし、そこで見つかった課題が研究のベースとなります。現地に入らないとわからないことが多いので、とりあえず行ってみようという勢いも大事だと思います。せっかく地方の大学に来ているのに、大学の授業とクラブ・サークル活動だけで、農村の地域を知る機会は少ないかなと感じます。アルバイトはぜひ、農業バイトをやってみてはどうでしょうか。3年生で研究室に入ってきた学生にいきなり地域に出て、興味があることに取り組んで！といっても難しい。学生は自分の興味ってなんだろう、研究の目的って何だろうって悩みますが、実際自分の興味が把握できるほど十分には学んできていない。授業や実験実習をしっかりやっても、実際の地域の課題や興味が分からないのは、そこを体験していないから当然。だからこそ、まずは入ってみよう。キャリア形成においても、ある程度自分のやりたい分野、例えば国際協力だとすると、その中で協力隊でも JICA 職員でも NGO でも

何でもいいと思うんです。農国センターのように、国際協力を行っている大学の研究室も増えてきましたよね。あまりこれって決めつけずに、視野を広くして、いろいろあってみて、その中で来たチャンスに乗っていったらいい。「やっぱりこれじゃなかったかな？」って悩むのは時間の無駄かな。6割7割方向性を決めて、そっちに進んでいけばよしとするみたいな。もう一つそこで大事なものは、その中で自分に足りないものに気が付くと思いますが、足りないことはそこから学んで行くしかないんです。その都度学んでも、常に不足感は湧き上がってくるもので、そこは仕方ない。最初から夢があって、そこになかなか到達しないギャップに悩むのではなく、やっていながら自分の成長を考えていけばいいことだと思う。やりながら、課題を見つけて、課題を解決してというサイクルをうまく自分の人生の中に取り入れていけばいいんじゃないかなと思います。

江原 それは、まさに浜野先生のキャリア形成ですね。

浜野 ただ、「キャリア形成や自分の成長」なんて、立派なことばかりではないと思います。ラグビーをやりたい！という学問以外の留学動機は、自分を動かす重要なエネルギーでした。それがなければ、留学はしなかったかもしれません。私が住んでいる村では、高齢化して担い手も減っていかなくて、農家の後継者や非農家がグループで集まって耕作する取り組みが行われています。そこに参加する動機は、「地域の農業のため」だけではないはず。仲間と農作業して、作業後は集まってお酒を飲むのが楽しいという動機が実はとても重要。それがまわりまわって、最終的に地域の農業を維持しようという思いを持つ。そのようなインセンティブって実はとても大事です。

槇原 ものごとは、楽しくなかったらなかなか続けられないですからね。正直言うと、私が国際協力で魅力を感じた理由としては、純粋に人の役に立ちたいという思いだけではなくて、海外に行っているいろんなものを見てみたいとか、珍しい食べ物を食べてみたいとか、そういった好奇心もありました。

浜野 国際協力って、なんとなくカッコいいというイメージもあります。青年海外協力隊をやっていた時には、自分はカッコいいことをしていると自己満足になっているところもあったと思います。でも、その思いは決して悪いことではなくて、国際協力の道に進むきっかけとして大事だと思います。

江原 人や社会のためではあるけど、その前に自分も楽しくないと始まらないということですね。

5. 仕事と家庭の両立はどうやって

江原 国際協力をやるとなると、海外出張がとても多くて、仕事と家庭を両立させるのも簡単ではないと思います。仕事と家庭の両立、ライフイベント等で苦労したことがあれば教えていただけないでしょうか。伊藤先生の場合は、お子様がいらっしゃって、大きくなっていて、菊田さんは昨年出産して、松川さんも先月出産されていますね。

松川 私の場合、国際農研に入ってから出産するまで、1年のうちの半分以上を海外で過ごしていたので、生まれたばかりの赤ちゃんがいる今、今後の研究スタイルを変えていく必要性を感じています。カンボジアで調査をされている伊藤先生や、ケニアで調査してきた菊田さんはどうお考えですか？

伊藤 今も長くて1ヵ月くらい滞在することはあります。私の場合は、子供が3才になってからは一緒に連れて行っています。ただやはり、子供を連れて行った場合、効率はとても下がるので、農村調査に行く時には連れて行かないことが多いですね。村々を歩き回るような調査の場合、小さい子どもを連れていくと、食事や昼寝の時間など色々と左右されて効率が下がりますので。途上国の中でも比較的都市部で開催される会議や、調整業務が主な目的の場合は、連れていくことが多いです。

松川 出張に行っている間はどなたが面倒を見ているのですか？

伊藤 その時々、同行している学生さんをお願いしたり、現地のベビーシッターをお願いしたりします。でも、初めてのベビーシッターに突然預けるのは勇気が要るので難しいですね。私が環境的にラッキーだったのは、母が保育士なので、日本に子供を置いていく場合は安心して預けることができるという点です。子供が1才になってからは、1ヵ月間の比較的長期の出張も年に数回ありましたが、安心して親に預けることができました。でも、預け先があることが前提の話なので、通常は難しいところですね。預け先がない場合は、出張に出る時期や期間について考慮せざるを得ないと思います。地域研究をされている研究者の方々は、子供と一緒に現地に長期滞在することでうまくマ



高収量の新しいイネ品種を使った栽培試験(ケニア)

ネージされているケースをよく見ます。教員の場合は、講義があるので長期で出ることにはできないのですが、研究員の方だと現地になるべく長い期間滞在することで、現地のシッターさんに子供を預けながら仕事をすることも可能だと思います。小学校に入るまでは、比較的出張に行きやすいと思った方がいいです。小学生になると、子供が学校を休むわけには行かないので、増々ハードルが高くなりますね。子供が長期休み(夏休み、冬休み)の時しか出張できません、という女性研究者もいますので、皆さん工夫しながら出張・調査・研究をされているなと思います。

菊田 私は、コロナの関係で今のところ子供を置いていくなり、連れていくのの出張はまだ経験していません。でも、今後どうしていくべきなのかというのはいつも頭につきまっていますね。

江原 仕事と家庭の問題について、ご結婚されてからイギリスに留学したり、カンボジアに長期滞在されたりした浜野先生は、どのようなお考えをお持ちでしょうか？

浜野 国際協力をやっていく上で、特に JICA の専門家や職員として長期で海外に赴任する場合、パートナーの仕事の



試験圃場でイネの生育を調査(ケニア)

兼ね合いや子育てについては悩むところです。私がカンボジアで長期赴任をするとなった時、私の妻は当時の仕事を辞めることを決めて一緒に来てくれました。この選択のおかげで、家族が今もうまくやれていると思います。留学資金を支援してくれた時もそうですけど、妻の理解と協力には感謝しています。やはり家族の理解は大切です。

榎原 自分も最近子供が生まれて、国際協力のキャリアと家庭の両立ということを考えるようになりました。JICA 専門家として海外赴任していた当時は独身だったため感じませんでした。家族がいた場合はもしかしたら違った選択をしていたかもしれませんね。

浜野 僕の場合、カンボジアにいた時に初めての子が生まれました。もし、日本で先に子供が生まれていたら、海外に行くというのはハードルが高くなっていたでしょうね。出産・子育てをする環境については、考えますよね。子供が生まれてから選択肢が変わりますよね。

榎原 そういう意味でも若いうちに、思い切って飛び込んでおくことは大事ですね。

浜野 今は、国際協力で携わる機会はたくさんあると思うけど、やはり家族を持つとなると給料や生活の安定といった点で選択肢が少し狭まってしまうのもやむを得ません。若いうちは、思い切ってやるしかないですよ。

榎原 悪いことばかり考えて、そんなところに行ったら結婚できなくなるんじゃないかと心配して外に出られない人もいるわけで、楽観的な人が一歩を踏み出せている気がしますよね。

浜野 榎原先生も私も、ある意味楽観的なところがあって、若いうちに思いっきりできたのかもしれないね。

6. 仕事のやりがい

江原 ここまでキャリアアップや大学での勉強についてお話しいただきましたが、現在の仕事のやりがいというのを聞かせてもらえますか。

榎原 今回の座談会に参加してくれている栗田さんは私のところで修士を取って、コンサルタントになるという夢を叶えて活躍していますし、菊田さんも博士を取った後大学教員としてアフリカの作物生産改善のために頑張っています。それから、海外からの留学生もそれぞれ帰国して活躍しています。農学とか国際協力とは関係のない企業に勤めている卒業生もいますが、みんなそれぞれ成長して頑張っているのを見ると、この仕事をやっていてよかったなと思います。やっぱり、これが一番大きなところですね。

研究活動という意味では、実際に農業の現場で役に立つ技術を開発することを目指しているのですが、言うほど簡単なことでは無く、まだまだ実現できていません。でも、少なくともそれを目標にして取り組めるということ自体にやりがいを感じています。

栗田 実施中の技術協力プロジェクトにおいて、現地の農業普及員の中には、手当がないとプロジェクト活動に非協力的である受け身な人が多くいます。その中でも、我々が技術移転している内容をちゃんと理解して、その国の持続的な人材育成や技術普及のために活動している普及員がいることは大きなやりがいです。

松川 私の場合は、研究テーマを選んだ時にカンボジア農家の収量が害虫被害などにより減るのをできるだけ少なくしたいという思いがありました。カンボジアの方々にはもう10年くらいお世話になっていて、まだ恩返しできていないと感じています。現在も国際農研でカンボジアの研究も細々と継続しているので、今後の研究によって彼らの減収をできるだけ少なくするという当初の目標を達成することで彼らの役に少しでもしたいと思っています。私としてはまだ成果を出せておらず、お返しできていないと感じていますが、カンボジアの方からは、ウンカについて研究してくれてありがとうという言葉をかけてもらえて、これからも頑張ろうという気持ちになります。今後、研究成

果を現場に戻すことで目標が達成できれば、これまでやってきてよかったなと思うと思います。

また、研究対象であるウンカは、長距離移動性という特徴があり、ベトナムから中国、中国から日本に移動して発生する害虫です。中国や日本では研究が進んでいますが、飛来源であるベトナムでは研究情報が非常に限られています。今働いている国際農研では、自分がベトナムに入り、これまで明らかになっていないことについて少しずつ証拠を集めながら明らかにしていくことができる点でやりがいを感じています。まだ十分な成果は出せていませんが、今後は現地の人だけでなく、飛来先の地域の人にも還元できるような研究ができればいいなと思っています。

菊田 私も研究を始めてまだまだ経験が浅いので、はっきりとやりがいを感じるまで至っていませんが、作物生産に関わる研究をしているため、農家や現場に役に立ったと思えた時にやりがいを感じるんだろうなと想像しています。今後10年先、もしくはもっと先に研究者をやってきてよかったなと思えるように、今は頑張っているところです。

短期的なところでは、私の研究分野である作物栽培学では、自然を相手に研究をしていますので、仮説を立てて研究をしても、思い通りの結果にならないことの方が多くあります。その予想とは異なる結果を様々なデータから検証し、その理由を明らかにできたときは、とても嬉しいです。

伊藤 他の皆さんに比べると若干長い間、経験を積んできたのかもしれませんが、だからといって大きな充実感を得るには至っていない気がします。むしろ、まだまだ足りないと感じることばかりです。それでも、現地の人たちが抱えている問題と一緒に向き合い、ともに問題を解明し、仮設した解決方法に取り組んだ結果、問題が解決したり所得が向上したりといった変化が確認できた時は、誰かの役に立てたという小さな充実感とやりがいが感じられる時ですね。

長谷川 ラボで研究されてきた材料をケニアの実際のフィールドに持って行き、実証ができた時にやりがいとこれからの研究の可能性を感じました。今後も、研究と現場をつなげる仕事に取り組んでいきたいなと思っています。



収穫後に積み上げられたイネ(ケニア)

7. これからの世代に伝えたいこと

江原 最後に今後国際協力の現場で活躍したいと思っている方々に一言お話しただけだと思います。

榎原 私自身のキャリアを振り返ってみると、若い時に一歩踏み出したことから、今があるのは事実ですが、運が良かったと感じることも多いです。飛び込んでみたけど思うようにキャリアアップできなかったという方もいらっしゃると思います。また、今後は経済発展してきている途上国と日本との関係もどんどん変わって来ると思います。そうすると国際協力の在り方も変わって来るので、必ずしも今思い描いているような国際協力の仕事があるとは限らないということは想定しておく必要があると思います。外の世界に一歩踏み出すことで、色々な可能性や選択肢が見えてくると思うので、その時に何を判断基準にして、決断していくのか明確にしていくことが大事だと思っています。また、その時々の勉強や仕事で努力することも重要です。きっちり身に着けたことは、仕事の内容が変わっても、結構役立つものだと思います。

栗田 私は、学生時代に、就職活動を通して将来の道を見つけたり、短期ボランティアに参加した結果、国際協力の方向性の中でも開発コンサルタントを目指すことを決意したりというように進んできました。比較的時間のある学生時代に、少しでもやってみたいことがあれば行動してみることをお勧めします。行動する中で出会った先生や一緒に活動した人たちと意見交換をする中で、そういう人たちの

意見を取り入れつつ自分の考えを持って進んでいけばいいのではないかと思います。就職活動に関して、私は、学生の頃から開発コンサルタント企業への就職を目指していましたが、思い通りにいかず大学院に入学したという経緯があります。大学院生として就職活動をして、大手のコンサルタント企業からは不採用となったため色々苦勞しました。その結果、今こうして中小企業の開発コンサルタント会社で働いているので、国際協力を目指す方には、辛い経験もあると思いますが頑張っしてほしいと思います。また、その時々で自分は どうしたいかを振り返りながら活動できればいいのかなと思います。

松川 後代の方々に伝えたいこととして、あまり考えすぎてチャンスを逃してしまうよりは、出会ったチャンスに思い切って飛び込んでみるというのが大事なのではないかと思ひます。私の場合は、先生方や友達、調査対象地の方々など周りの人に恵まれたので、思い切って飛び込んで、流れに乗ってきて今に至る感じています。

菊田 国際系のキャリアは入口も出口もかなりたくさんあるので、私自身も次のキャリアについて迷ったりしていますが、皆さんが言う通りチャンスがあればとりあえず挑戦してみる、うまく行かないこともあるかもしれませんが、新しい出会いがあり、色々な歯車が回り始めて、次のステップにつながることもあるんじゃないかなと思います。

伊藤 とにかくやってみることだと思います。中高生で明確な夢があつて、そこに向けてまっしぐらに頑張っていける人ってそんなに多くないと思います。漠然としたイメージを持ちつつも、目の前に来たことを一つ一つやってみるということは実は、その後の人生における引き出しの数を

増やしてくれるのだと思います。今やっていることが、将来何につながるのか、分からないこともあります。でも、10年20年経った時に「あの時、経験しておいて良かった」と思うことや、「このために過去の経験があつたんだ」と感じられることは結構あります。将来に役立つ引き出しを増やしていると思えば、その時に意義を感じられなくても精一杯向き合えば、それが次の道を導いてくれることもあります。

長谷川 自分でチャンスを見つけるのも大事だと思いますが、松川さんもおっしゃられていたようにあまり考えすぎずに目の前のチャンスに飛び込むのも大事だなと思います。私の場合もいろいろなチャンスをもらって、行ってみて、そこで自分の力不足を感じ、ダメージを受けたりすることもありました。でも自分の力を知ることが次への原動力にもなり、重要な機会だったなと思っています。

江原 やりたいと思つたこと面白いと思つたことに思い切って飛び込んでみないことには何も始まらないということですね。もちろん、いつもうまくいくとは限りませんが、運をつかみとるためには、それぞれのステージで人との出会いとその経験を大切にしつつ、実力をつけていくことが大事だというアドバイスでした。名古屋大学では大学院博士後期課程の学生が経済的な不安を感じることなく調査研究活動に専念できる環境を整えるため、融合フロンティアフェローシップ制度をスタートさせます。未来の知の継続的創出や社会実装を担うグローバルな人材を様々な分野へ送り出すことを目的としています。このような制度も活用して、多くの方が国際的なステージで活躍できるよう支援していければと考えています。